

愛野町の位置と扇状地

位置

吉富 一

- 一、秀麗な雲仙火山の裾野に位置する
- 二、島原半島のつけ根（喉元）
- 三、水陸交通の十字路
- 四、佐賀藩との藩境地帯的位置
- 五、島原―諫早間の漸移地域
- 六、隣村（吾妻・森山・千々石）に対する位置
- 七、数理的位置

愛野扇状地

- 一、雲仙火山の裾野
- 二、美しく並んだ裾野の浸食谷

この稿は愛野町教育委員会の委嘱をうけて書いた愛野郷土記の一部である故、愛野町民向けの文体になっていることを、あらためて御了承を乞う。

愛野扇状地（雲仙火山の裾野）



1. 雲仙火山の裾野を10程の河川が浸食して美しい。
2. 前面には有明海の干拓地が規則正しい方形で、昔の有明海の名残りをとどめている。
3. 右上は一直線の千々石断層で陥没し、その下には千々石町、猿葉山、橘湾が見える。
4. 右上に愛野展望台が見える。

愛野の位置

一、秀麗な雲仙火山の裾野に位置する

諫早平野より秀峯雲仙岳を眺めると、雲仙岳の美しい裾野が、雄大な曲線をえがいて、有明の海になびいている。あたかも神秘的で荘嚴な天女の裳裾を彷彿たらしめ、見るもの、胸をうつものがある。更に眼を西に転ずると多良火山の秀麗な裾野が有明の海になびき、雲仙岳の裾野と相對している。この付近からの眺望は大自然が生んだ雄大な芸術である。（第1図）

火山国日本の祖先は、数千年も昔からこの雄大な曲線を天守閣や神社佛閣の屋根に利用することを忘れなかった。「火山の秀麗な形態が、日本人の家屋の屋根や城砦、濠池の城壁のあの曲線を思い出させた最初の暗示であったと私は思っている」

（ジョン・ミルン）

第1図 秀麗な雲仙火山の裾野



愛野はこの美しい裾野に位置する

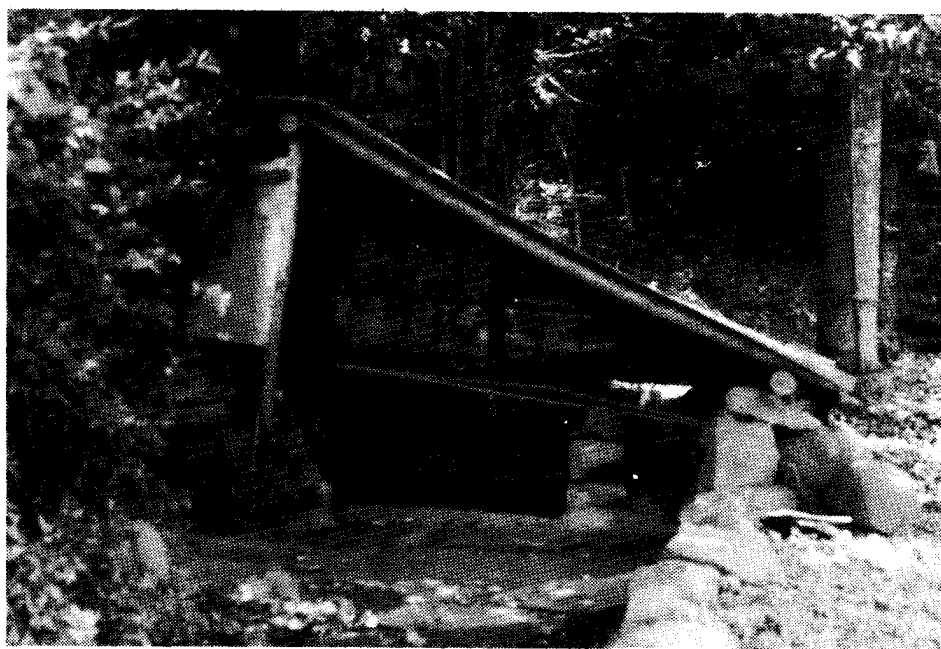
この雲仙火山の雄大な裾野と前面に広がる有明海の干拓地に位置する町が、我等の郷土愛野である。

雲仙火山の裾野を科学的に言えば扇状地という。扇状地とは、降雨の度毎に山体より流れてきた土砂や砂礫が山麓に扇状に推積した地形をいう。この扇状地の先端、いわゆる裾野の端からは、こん／＼と水が湧くのが原理で島原が最もよい例である。

野井の「野」は緩やかな傾斜地をもつ扇状地の斜面を意味し、「井」は裾野の湧水である。裾野に位置する野井の十拳剣神社の崖下からは綺麗な水が湧き出ている。新井・新居（ニイ）が野井に転化しているが、ニイは新しい用水路を意味する。（註1）二八頁

愛津のアイも湧水を意味し、愛知県のアイチの地名の起源がよい例である。アイチ（アユチ）とは田の湧水にちなむ地名である。鏡味完二の地名の起源によるとアイとは村境の相の神にちなむ地名であると言う。三軒茶屋付近の山王神社は愛野町と森山町の境であるが、神社の

第2図 山王社、三軒茶屋付近の古めかしい湧水



島原藩の陸の玄関

石段下には歴史の古い湧水があり、見るからに荘厳な神域である。ここは島原藩に入る喉元で参勤交代の行列の水呑場として三軒茶屋と共に、忘れることの出来ないところであろう。(第2図)(第5図)

愛津・野井の地名の起源については、前記湧水のこと以外に左の三つが考えられる。

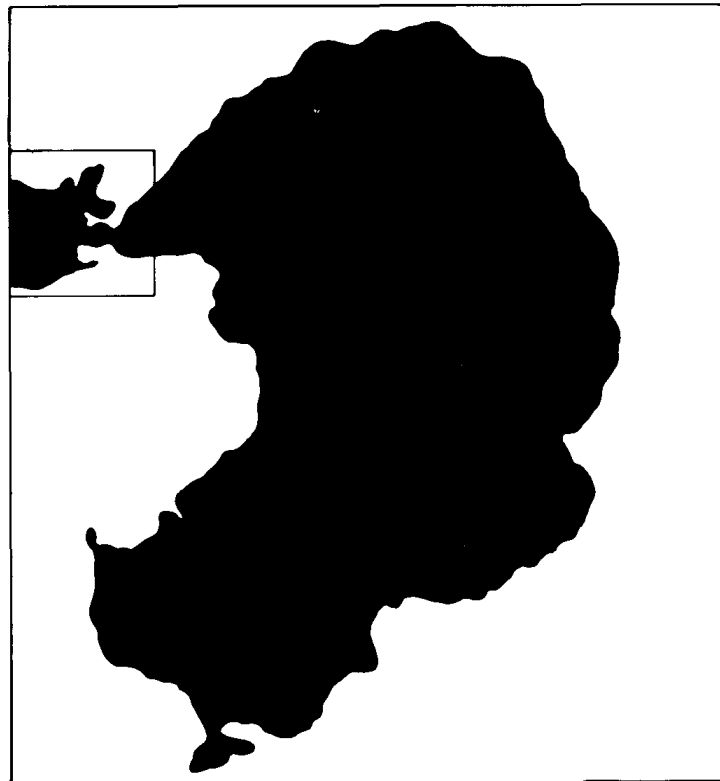
①、愛津は古くは会津・合津と書かれているが、福島県会津の起源は古事記に、四道將軍の大彦命が、越の国から、その子タケヌナカワワケノミコトが東国から来て、ここで出会ったから相津というと出ている。相は会いと同じで愛野の愛津付近にも相原・上相原がある。奈良時代の肥前風土記に左のようなことが書いてある。景行天皇が九州遠征の折、対岸長州の浜より島原半島を御覧になって、「雲仙岳は火山島か、又は九州本陸と陸続きで半島になっているか、朕は知りたい」とおっしゃる。よって神大野宿弥という使者が、勅命により島原半島に来るが、この勅命をはたすためには、当時

の波静かな愛野海峡を南下して、入江の奥の中島・唐津・浜口又は橘湾岸の浜・唐比に来なくてはならない。この大和朝廷の使者に対して島原半島の先住勢力者がだまっている筈がない。合津で会見して礼を尽くしたのである。この勢力者は隣村吾妻町に当時の文化を象徴する条里集落がある点よりみて、ここを中心として島原半島・諫早湾岸に勢力のばしていた勢力者でなかっただろうか。(註2)二八頁

肥前風土記

昔者むかし纏向まきむくの日代ひしろの宮みやに御宇あめのしたろしめしし天皇・肥後すめらみことの国玉名こほりの郡なかつの長渚ながすの浜かみやの行宮いまに在いまして、此こほりの郡なかつの山やまを覽みまして、のりたまひしく、「彼の山の形は別れ嶋に似たり、陸に属ける山か、別れ居る嶋か。朕 知らはく欲おもふ」とのりたまひき。仍すなはち、神大野宿弥かむおほのすくねに勅おほせて、看みしめたまひしかば、此郡に往き到りき。爰こゝに人あり迎むかえ来て、いひしく、「僕は此あの山の神、名は高来津座たかくつとまをす。天皇のみ使の来ますことを聞きて、迎

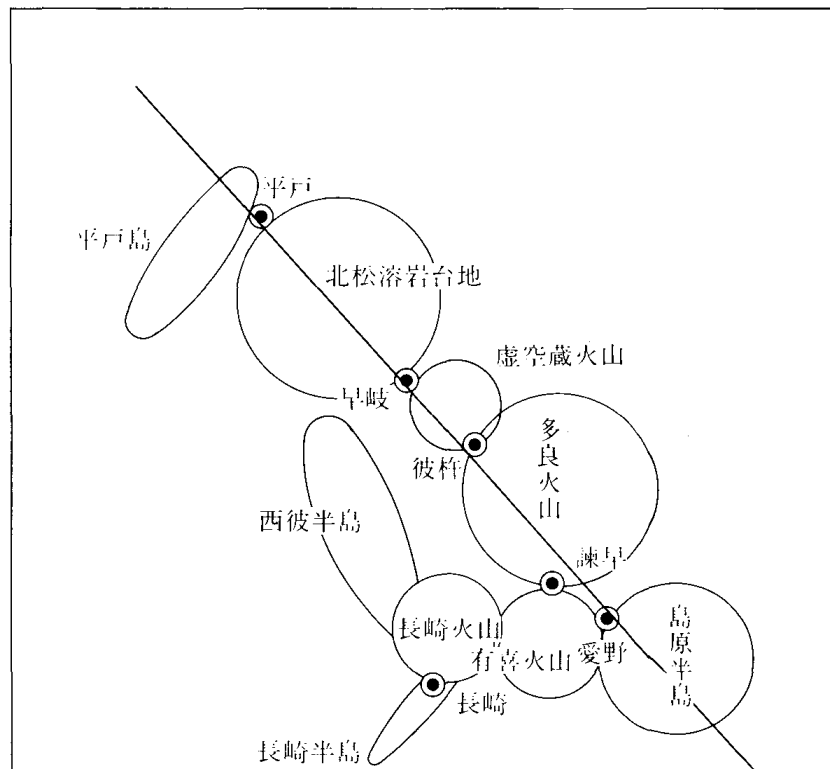
第3図 島原半島に対する文化の掛橋愛野



古代に於て幅1kmの雲仙火山の裾野でつながっている（愛野地峡）

第4図 長崎県に於ける愛野の位置

サボテンの継目は交通上の要所である。
愛野は島原半島の継目である。



え奉らくのみ」とまをしき。因りて高来の郡といふ。

②、江戸時代の渡し場として対岸の唐津に相對する港として会津・合津・愛津となった。土地の古老は渡し場時代を知っている。

③、野井（ノイ）は新居（ニイ）の転化したものである。野井地名の起源を新居にすると新しい居住地ということになる。

隣町吾妻町山田川の下流の沖積平野に、奈良時代を象徴する条里集落が発達したから、その西南にある千鳥川下流の沖積平野に新しい居住地が発生したのでないだろうか。野井の園田・大坪、五郎丸・宮添・鬼塚等の歴史ゆかしい地名が之を証明する。

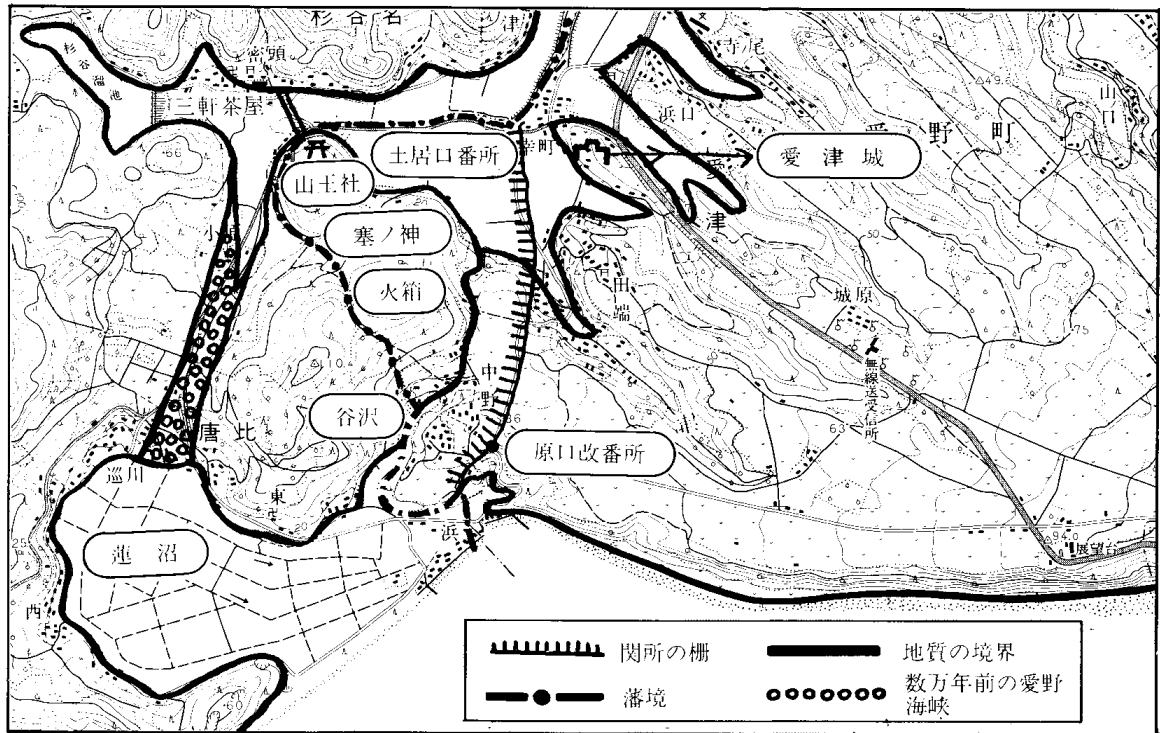
二、島原半島のつけ根（喉元）（第3図）

古代に於て海青き愛野海峡は南の奥深く入込み、最少限幅一杓のせまい地峡であったことが地形・地質で察せられる。（第3図）この愛野地峡こそは、島原半島という

火山島に、九州本土より架けられた「文化の掛橋」ともいふべきものであった。又「喉元」ともいふべき地理的條件をもっている。第4図は長崎県であるが、サボテン状をなしたそのつけ根の部分に於て、愛野が如何に典型的地域であることがわかる。

愛野地峡の地理的位置は、文化の流入口という立場と軍事上の関門という二つの立場からみなくてはならない。日本々土より文化の流入口ということ面白く表現するならば、島原半島という大きな胃袋に、本土よりの營養の補給口という表現をすることが出来る。（第3図）故に我が愛野は島原半島に於て本土より最初の文化の洗礼をうけた土地とみるべきである。このことは朝鮮半島という橋を渡ってきた東洋文明を、北九州が真先にあびたこととよく似ている。火箱文化などはこのような見地よりみるべきでないだろうか。本土より島原半島にいく場合、山王社―火箱―中野という（藩境）を通るコースが、當時としては最も理想的であった。（第5図）

第5図 愛野海峡、愛野地峡、島原藩境、関所柵、地質境界図



古代に於て愛野をふくむ島原半島北部の地理が最初にあかるくなつたことは左の二つでわかる。

①、和名抄や肥前風土記に新居（野井）・山田・神代・野鳥の四郷のみしか記されていないこと。野鳥は千々石で野取という所がある。千々石は古代の島原半島の郡家（中心）があつたのではないだろうか。

②、奈良時代の地理書である肥前風土記に於て、長崎県、南部は愛野地峡付近しか書かれていない。それに雲仙の湯を付加してある。前記合津に於ける奉迎の記と、土齒の池の記である。土齒の池は唐比の蓮沼のことであらう。（第5図）

③、神代郷の神代直は景行天皇九州遠征の折の陪従（おともびと）である。

④、島原半島の地峡部（つけ根）にある首塚は、大和文化がこの地峡を通過して島原半島に波及する頃の最初を物語る古墳である。古墳文化前期を物語るもので、地峡（くびれたところ）にある古墳で、首塚になつたのであ

ろう。

その他地峡部は軍事上よりみて、外敵侵入の勢力を防ぐ唯一の関門である。戦国の頃佐賀の竜造寺隆信は井牟田を通過しているから、この地峡部を通過して島原半島に侵入したのであろう。又島原の乱の時叛徒の出口を防ぐ雄一の関門であつたかも知れない。首塚を真の意味で首に解すならば、叛徒をこの関門で捕えて処刑したのではないだろうか。

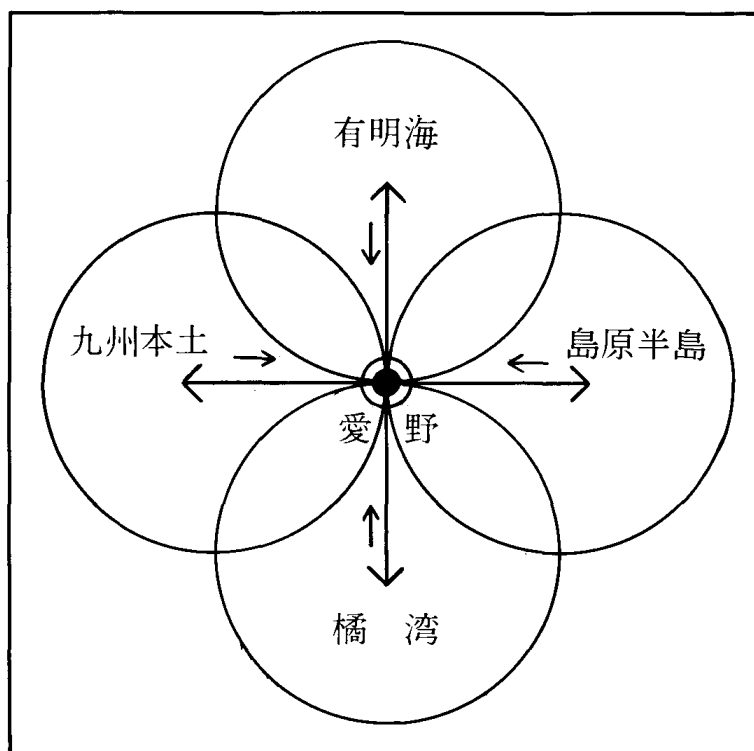
関所が土居口・土竜坂・原口にあり、その間を竹矢来でしきつてあるが、実際の藩境より後退して関所の柵があるのは何故だろうか。おそらく左の五点から考えられる。

(第5図)

1、地形・地質的にみて、この線が島原半島（雲仙火山）の境界線であること。雲仙火山の裾野と森山側の山が、この線で相接していること。原口の地名（裾野の入口）がこれを証している。

2、この柵が平坦な地形で竹矢来をつくりやすいこと。

第6図 愛野は水陸交通の十字路



愛野は地峡でもあり海峡でもあつた

3、隣藩に対して見張がきくこと。

4、土竜坂・原口間が島原半島の最もせまい地峡であること。

5、山王社・火箱・原口間の藩境は地形上の凹凸があり又対敵監視にも不適當であること。

関新田の堤防（土居）が出来るまでは、土居口の関所よりも、山王社（三軒茶屋）付近が、島原藩西端の関門として最も重要なところであっただろう。この付近の佐用の元に塞の神をまつてあるが、これは藩境安全・道祖神（道路安全）として民俗学上研究する必要がある。他藩には男女間の性の神として種々の物語伝説が多い。

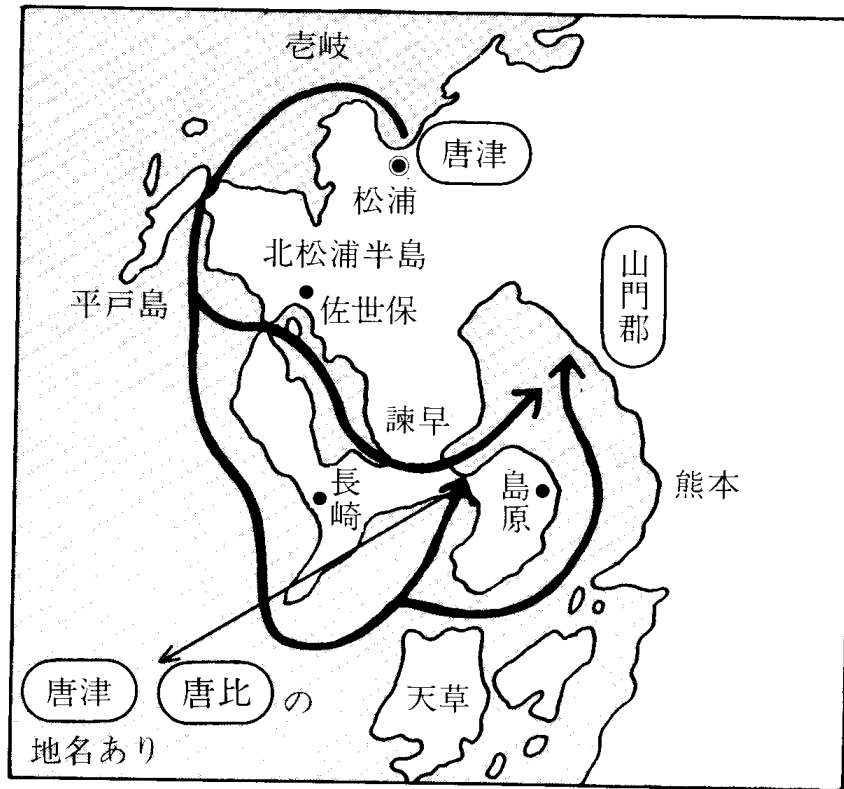
土居口番所の上に愛津城があるが、島原半島関門の守として重要な城であったことに間違いない。箱根の関所の小田原城、不破の関（関ヶ原）の彦根城の縮図といったらよいだろう。（第5図）

三、水陸交通の十字路（第6図）

愛野は地峡でもあるが、有明海から、橘湾に通じる海峡の時代が太古にあった。現在は前述の如く幅1kmの地峡で連絡を絶たれている。（第5図）愛野の歴史に於て、島原半島―九州本土間の地峡的交通と同時に、有明海―橘湾間の海峡的交通ということも忘れてはならない。この有明海―橘湾という二つの海を持つ点に於て愛野は島原半島で、特殊の地理的条件を持っている。有明海は愛野にとつて前面の海であり、橘湾は背面の海である。この点に於て愛野は水陸交通十字路の縮図ともいうべき特性をもっている。愛野は島原半島に於て水陸交通の十字路という特殊の地域性をもっているから、古代の歴史研究に於ては注意しなくてはならない。

諫早の古代に於ける地名は船越で、大村湾・有明海を通過して水陸交通の要路であった。太古に於ては海峡であったが、古代に於て小船越（総合運動場）付近で地峡となり海との連絡を絶たれた。古代の人はこの地峡を船

第7図 松浦より山門郡に行く道程想像図



諫早地峡を船越しているから、愛野地峡も船越していないだろうか。

を引いたり、かついだりして船越作業をして、両海の連絡をとった。これが船越地名の起源で、早く運河を掘るようにと暗示をあたたえたような地名である。船越とは原始運河交通地名といったらよいだろう。船越以外の地名には船坂・船引原等の地名が全国にあり、船越作業をしていたことは古典により実証されている。

文学博士田中卓氏の説によると、古代の女王国耶馬台国（山門郡？）に舟行するには末廬国（松浦）より大村湾に入り、諫早で船越して、山門郡に行っていたのであろうと書いてある。（第7図）

諫早の小船越付近に於ては、総合運動場付近の地底から舟が出土するという、愛野付近の唐比の蓮沼からは古代のくり舟が出土して、唐比温泉の庭に陳列してある。おそらくこれらのくり舟は、当時の愛野地峡を橘湾から有明海、又は有明海から橘湾と船越して通過していたに相違ない。諫早地峡・愛野地峡共に古代に於て幅2km程度である。フイリピンに於ては舟に人や荷物を乗せたまま、あたかも

駕籠をかつぐようにして地峡を越すと言う。沖縄も石川付近に於て船越作業をして横断していたことがある。

愛野海峡に唐津があり橘湾岸に唐比(カラコ)がある。

唐比・唐古を地名辞典でひいてみると「韓国人」の帰化地と書いてある。奈良県の唐古は我国古代の米作で全国的に有名な所である。我々が古代の夢をたくましくするならば、女王国耶馬台国に行く道筋は、佐賀県の唐津を出発して諫早地峡を通過したばかりでなく、愛野地峡も通過したのではないだろうか。(第7図)

四、佐賀藩との藩境地帯的位置

愛野は島原藩の藩境地帯的位置で、元禄十三年から延享元年まで、江戸時代中期四十五年間にわたって藩境紛争をおこしている。この藩境紛争を愛野地峡と愛野海峡(干拓地)の二つに分けて地理的に説明してみたい。

1、愛野地峡の藩境(第3図)

愛野地峡とは過去の海峡であった現在の干拓地をのぞ

いた部分で、過去に於ける真の意味の島原半島陸続きの部分である。又は雲仙火山の噴火により九州本土と陸続きになった部分を言う。(第3図)

この場合は注意しなくてはならないのは、山王社―火箱―中野―浜の藩境に関所の柵をおかずに、土居口―土竜坂―原口の線に後退して柵を設けた理由である。その理由を前項関所の部でものべたが、更に左の二点をのべてみよう。(第5図)

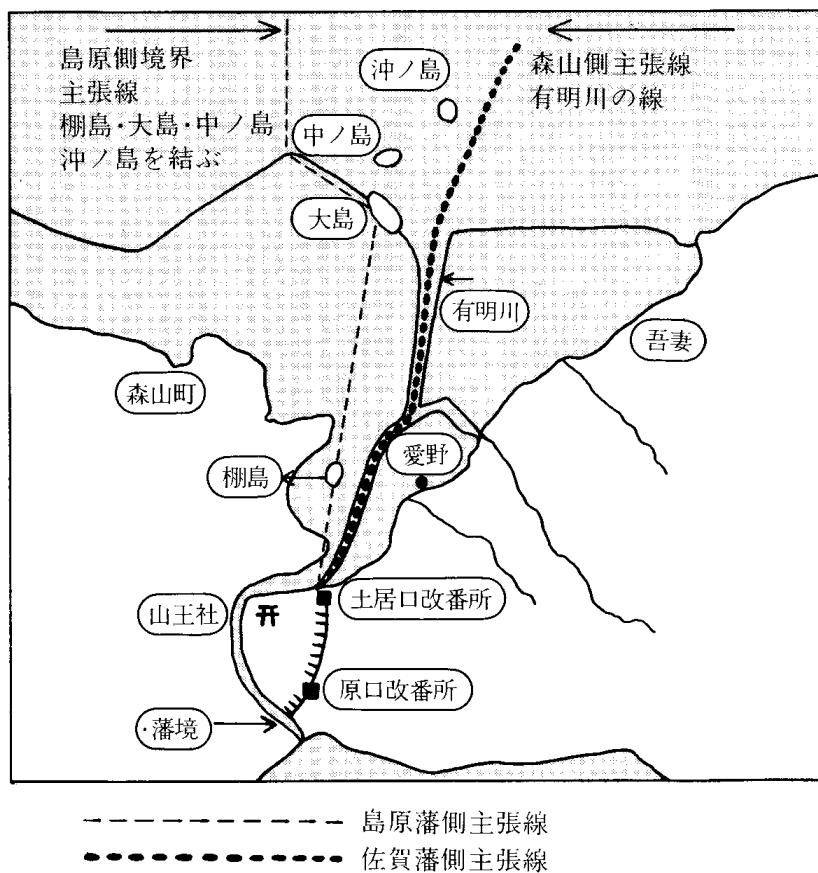
1、関所の柵外の村を「村外」と称し中野・山河・沢の部落がある。この地域は火箱山(一二三メートル)を中心とする山地である。山は理想的な境界で、まさに島原藩の関門をふさぐ天然の城壁である。関所の柵外に、この山地をおいて、島原藩防衛の第一線にしたのであろう。

2、国境など真の意味の理想的な境界は「境界線」ではなく、「境界帯」がよい。直接接触をさけるため、中立地帯を置いた方がよい。この村外は中立地帯又は境界帯のような意味のものであろう。

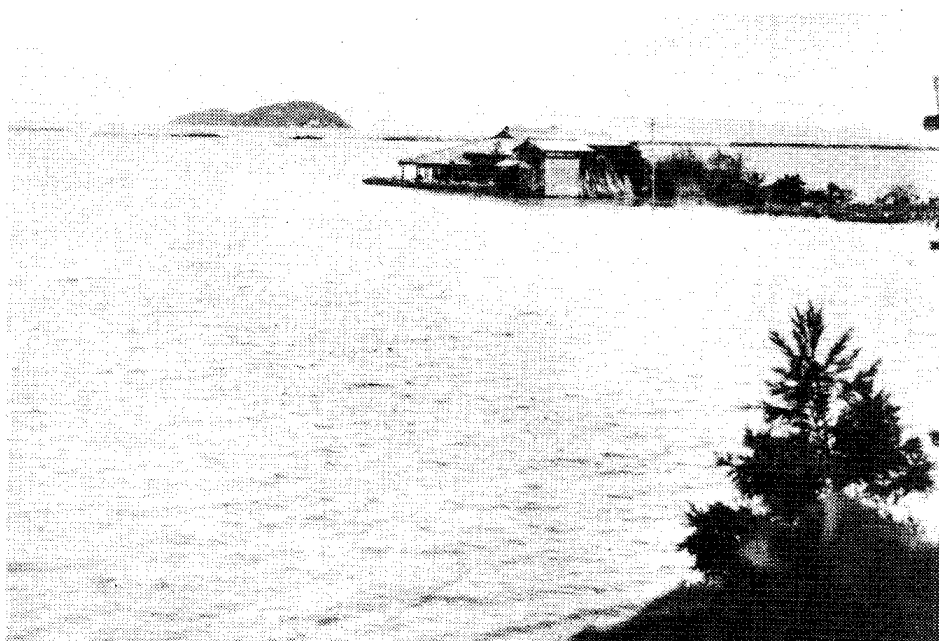
第8図 島原藩境論争図

島原側主張線
三ツ島、棚島を結ぶ

森山側主張境界(有明川)



第9図 愛野の平野が有明海時代を想像させる写真

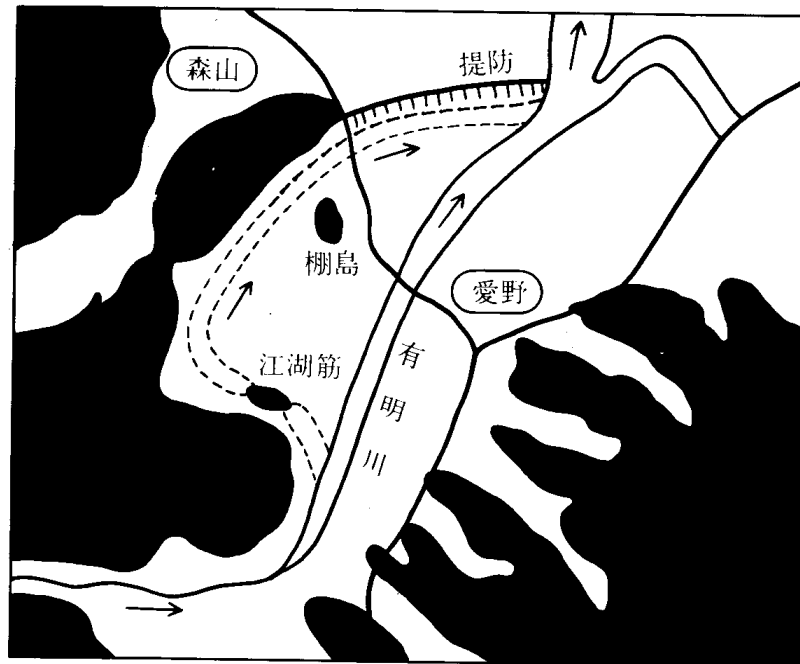


遠景に多良岳、大島が見える。右の下にの当時の小浜鉄
道が沈んでいる（風水害写真）—昭和2年—

2、入江の藩境(第8図)

杉谷・山王社方面より愛津をへて有明に注ぐ大江川(有明川)周辺の干拓地は、その名の如く過去に於いて大きな入江であった。(第9図)それに自然は上流や周辺より豊かな土じょうを流して浅瀬(潟)をつくってくれた。人はこの自然に協力して現在の豊かな干拓地を築きあげたのである。満潮の時はこの大きな入江は山王社・中島方面まで水をたたえ、干潮の時は大きな潟地となり、潟地の中央を大江川(江湖筋)が、有明海の方に流れていた。「大江川」「江湖筋」の地名の起源がよくわかる。(第9図)有明海は全国一の干満の差を有する内海で、その広大な潟地と共に、特異の風土(地域性)を形成する。これらの潟土は愛野周辺の川より流れてきたものもあったが、有明海を一周する海流の循環で、阿蘇の火山灰等が堆積したものである。大江川の奥地の場合も、潮の干満によりこれらの潟土が堆積しているわけである。

第10図 想像される有明川の蛇行帯(江湖筋)



棚島が島原側に属するのは、当時の有明川が大きく西に蛇行して、棚島の西方を流れ島原側にあったからでないだろうか。わづかに残る江湖筋がその方向を暗示している。

これらの有明海という特異の風土を有する海や潟地を藩境とするのであるから、藩境紛争も複雑で他藩にない特異なものが生じたであろう。まともな陸地でさえも江戸時代は各地で境界紛争がおこっているのであるから陸地の揺籃ともいうべき半陸半海の潟地は不安定で、藩境も不安定だったに相違ない。

3、柵島が島原側に属する理由①

山は境界として理想的な境界である。山の尾根の鋭いアルプスなどの場合は益々有利な境界である。川は境界として理想的でない。洪水の度々に流路の変更があり、又人為的にも変更が出来るからである。ましてや河川が袋状に蛇行していた場合は、洪水の度毎に境界が変更される。米国・メキシコ間にあるリオ・グランデ川がよい例である。

森山側(佐賀藩)の目と鼻の先にある柵島を山田側(島原藩)が占有を主張するのはこのような河川蛇行の事情によるものであろう。(第10図)

潟地は半陸半海で軟かく不安定であるが、その上を流れる川も、河川の揺籃で不安定で、又軟泥のため容易に変更できるものである。森山側は有明川を境界として主張するが、有明川はかつて、唐津方面より西にまがって、備後崎と柵島の間を大きく蛇行して、柵島が有明川の東にあり、島原側にあった時があったのでないか。(第10図)これを証明する為に左の三点をあげたい。

○唐津より江城を経て備後崎の堤防にいたる山麓線が、美しい蛇行線を描くこと。

○唐津の北にその川の趾と思われる池(江湖)があり蛇行の方向を指示していること。(第10図)

○島原側は千島川等十数個の河川があり土砂を潟地に流し込み、河道を大きく森山側におっしやったことが蛇行の原因であろう。

4、柵島が島原側に属する理由②

柵島が山田側に属した理由について、左の件が考えられる。山は境界として理想的であるが、入江や内海は理

想的でない。境界どころか兩岸を融合し媒介の機能をはたす場合がある。一国が対岸の島などを支配して、入江や内海を中心とした一つの統合体（文化圏）を形成しようとする。左に例をのべよう。

○ 琵琶湖は東西兩岸の境界となるどころか、兩岸を融合し、琵琶湖を中心とする近江の国を形成している。

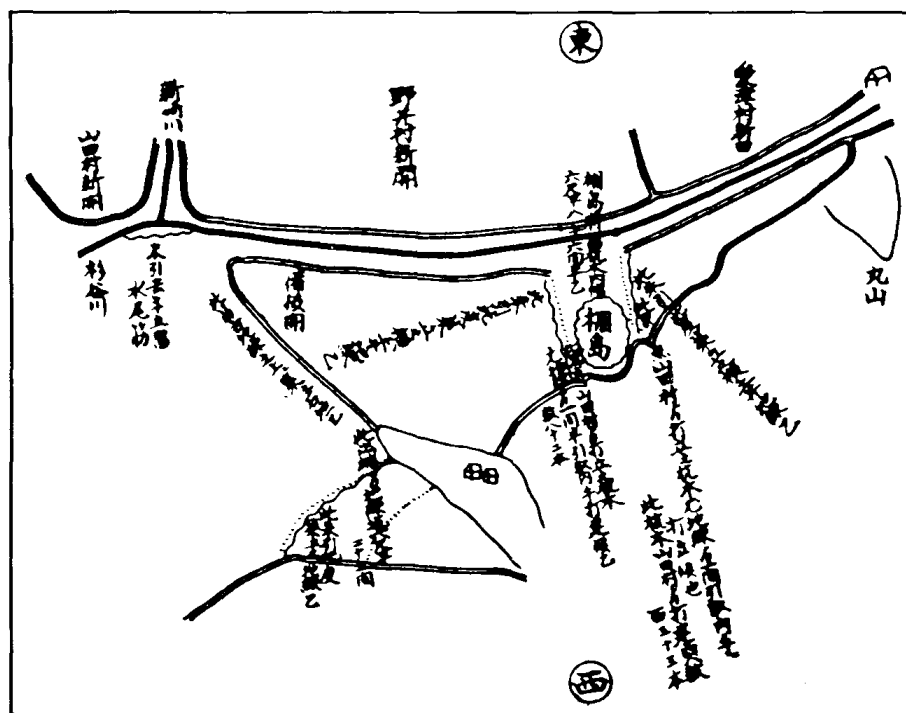
○ 地中海はヨーロッパとアフリカの境界線どころか、ローマは対岸を支配して地中海文明を形成している。

○ 大村湾は大村湾を中心とした彼杵の国を形成した。西彼杵郡は東彼杵郡の対岸支配とみたらよいだろう。

○ 有明海は九州の母なる内海となり、九州文化の統合又は媒介の役目をはたしている。

このような事情により、山田側は古来より有明川周辺の入江の制海権を獲得していたから、「山田から愛津・土居口まですべて山田海であった。」と言っているのでは

第11図 安政4年閏5月8日の絵図



諫早側の備後開干拓に際し、島原領、棚島の周辺は船行出来るようにしてある。

ろう。その後潟地や干拓地の発達とともに、森山側は有明川の境界線を主張し、山田側は棚島・大島・中の島・沖の島の線を主張し、双方の見解の相違をきたしたのであろう。(第8図)

他国の前面にある島を或国が獲得した例ではイギリス海峡のチャネル諸島がある。イギリス領がフランスの海岸の前面にある。日本の例では伊万里湾中の福島が佐賀県に近接しているが長崎県に属する。理由は戦国の世に平戸を中心とする松浦水軍の伊万里湾の制海権獲得と対岸支配である。

島原領である棚島が森山近くにある関係で、幕末の安政四年森山側が備後開を干拓する時左のような無理を生じている。

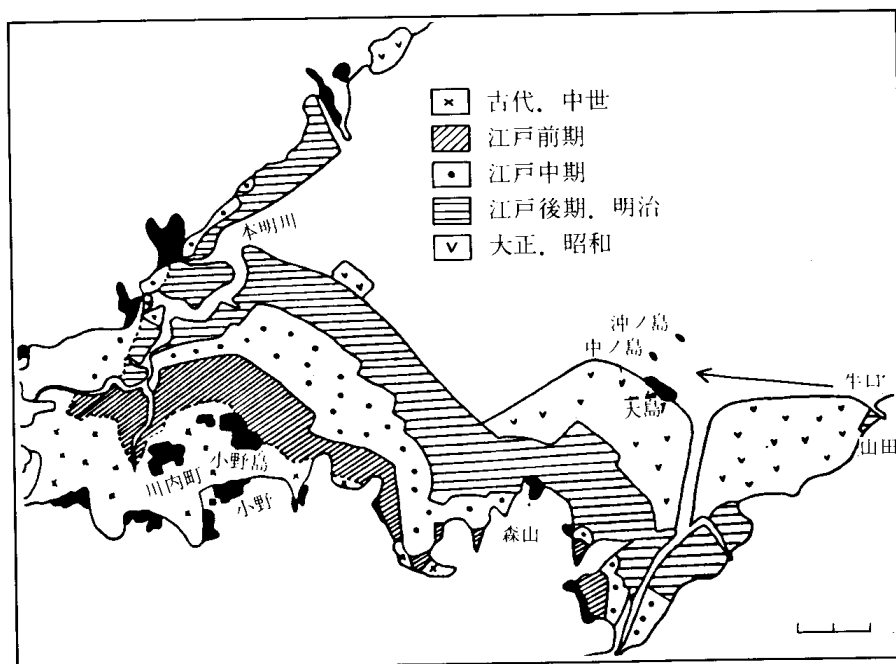
「棚島に森山側は堤防を接岸してはいけないこと」

「棚島の周辺を通船出来るように明けること」

「有明川から棚島に行けるよう幅六間半を開放すること」

(第11図)

第12図 諫早平野の干拓(時代順)
(三島が山田側に属する地理的条件)



- 諫早湾の奥地程歴史が古い。
- 山田側は海上活動が自由である。
- 森山側は早くより海上活動を干拓で阻止されている。
- 土肥利男氏著「多良山麓」の図表に記入

第13図 愛野と諫早・島原の距離関係図



- 愛野にとって諫早が便利である
- 愛野は島原～諫早間の漸移地域である。

5、三島が島原側に属する理由

次に地形・地質共に森山側に属すべき三ツ島が山田側に属した地理的条件についてのべてみよう。

諫早湾の入江の奥地程早く潟地や干拓地は形成され、干拓の歴史は古いものである。(第12図) これに対して諫早湾沖は反対で潟は少なく、海は勿論深い。前者に属するものは野井・愛津・森山で、港は機能を失い、海上活動は潟で前面をふさがれる。後者に属するものは山田で潟地は岩盤に変化し、海は比較的深く、海上活動は盛である。野井の船津が港らしい地名だけ残しているのに対し、吾妻の牛口は末だに港の機能をはたしている。このような事情より山田が早くより諫早湾の制海権を獲得し三ツ島をさきがけて領有したのであろう。

諫早湾の奥程、愛津・唐津・船津等の港名を残して港の機能を喪失していったことは島原大概様子書の左の数字がよくこれを証明している。

文政六年改

1、牛口・阿母 船一四一 阿母は北目中漁業第一の地なり

2、野井船津 船二 物産なし(水産?)

3、愛 津 漁業関係の記事なし

五、島原・諫早間の漸移地域(第13図)

漸移地域とはA地域・B地域の中間にあつてA・B両地域の中間的性格をもつ地域をいう。例をあげれば亜熱帯は温帯・熱帯の中間にあつて、温帯・熱帯の中間的性格をもっている。

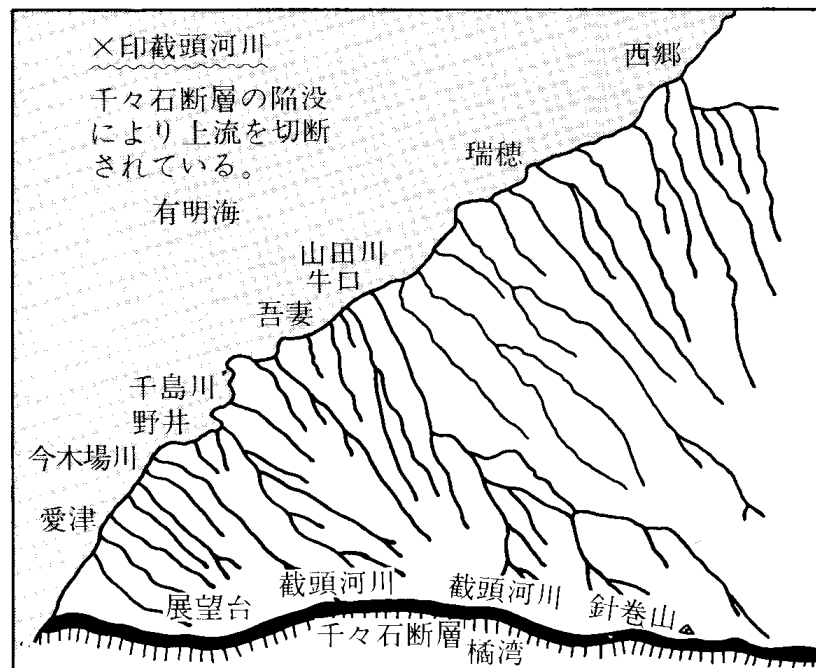
第13図に於て愛野は島原半島(島原藩)に位置し多分に島原色を帯びると共に、諫早方面(佐賀藩)と境を接したせいか多分に諫早色を帯びている。いわゆる亜島原・亜諫早といったらよいだろう。第13図をみたらむしろ諫早色が強いのではないだろうか。通学圏に於て諫早高等学校の愛野分校があるのがこの最もよい例である。かつて農業学校の分校もあった。このようなことは通学圏ば

かりでなく、仕入圏・販売圏・通婚圏・通勤圏・人口構成・転入その他あらゆる部門より研究して見る必要がある。愛野にとつて諫早は平野のむこうに直線的にありながら、島原は雲仙岳を中央に於て真裏にあり、しかも諫早の三倍の距離で大迂回している。直線距離をとらんとするならば、昔の山越街道の険を覚悟しなくてはならない。いわゆる九千部岳下の田代原経由である。(第13図)このような点より愛野を考察すると、愛野は島原半島という立場と共に、諫早湾を取囲む一つのまとまった文化圏という立場から位置を考察する必要がある。かつてこのような古代小国家が考えられるという。

六、隣町(吾妻・森山・千々石)に対する位置

一国にとつて周囲に如何なる国があるかということはその国の政治・経済・歴史を左右する。規模は小さいが一町村に於て、隣に如何なる町村があるかということは、大なり小なり、その町の政治・経済・歴史を左右する。

第14図 愛野地形の東方拡大



- 雲仙岳の裾野を千々石断層で切断されている
- 河川は愛野より東方にいくにつれ大きくなっている
- 吾妻は愛野に地形、地質共に類似（相似形）している。

隣村を無視した郷土誌はありえないだろう。

○森山町に対して

古来の愛野海峡を中心にして、愛野町とは地形・地質完全に愛野町と異なる。愛野町の広大な雲仙火山の裾野に対して、森山町にはこのような地形は完全に見あたらない。いはゆる愛野町が新しい雲仙火山系統に対して、森山町は雲仙岳より古い有喜火山系統に属する。愛野町が角閃安山岩に対して、森山町は複輝石安山岩、（森山安山岩）に属する。古来藩境論争の烈しかった棚島・大島・中の島・沖の島は地形、地質共に森山町側に属する。これらの島々は森山安山岩に属する森山町の小山が有明海に沈み、海面より小山の頂だけが頭を出していると思えばよい。

森山町は愛野町（島原半島）に対する。本土文化の移入路として重要である。愛野海峡の干拓による交通路の変遷は、森山町の交通路の変遷と関係が深い。愛野海峡は江戸時代に於ては藩境として森山側と生活を二分され

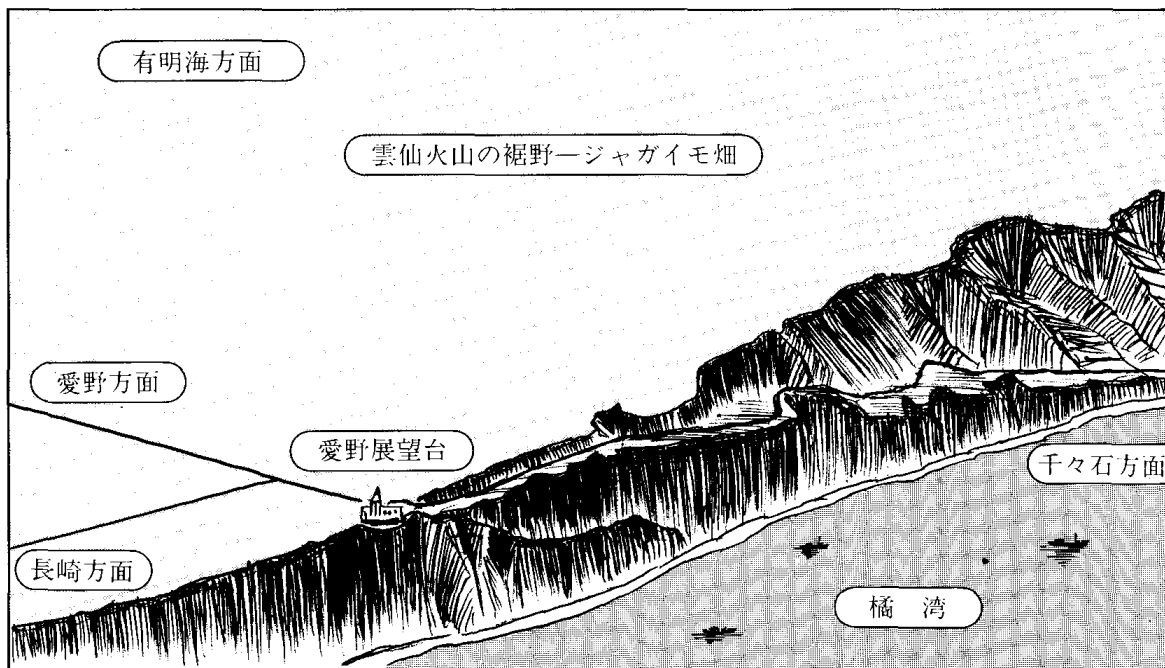
たけれども、古代に於て海青く波静かな愛野海峡とその兩岸は海幸、山幸に富み、海はむしろ兩岸の人を融合させていたのであろう。すなわち愛野海峡という内海を中心として統合された一つの生活圏が考察されるわけである。

○吾妻町（第14図）に対して

西方の森山町に比し東方の吾妻町は地形・地質共に愛野町に類似する。雲仙岳の裾野は吾妻町の方に拡大した形をとっている。愛津付近の小さな河谷は野井の千島川と東方に大きくなり、山田川にいたって十数倍の長さに拡大している。（第14図）従って下流の三角州も、愛野の千島川等に比し山田川が規模が大で地理的条件は有利であった。奈良時代に吾妻町に基盤目状の条里集落が発生したもの、このような点より考えなくてはならない。長塚・大塚・古城等の代表的古墳がある点よりして、島原半島北部に君臨した大勢力家があったことも考え、これらの勢力と愛野との関係も考察する必要がある。（第14図）

第15図 千々石断層

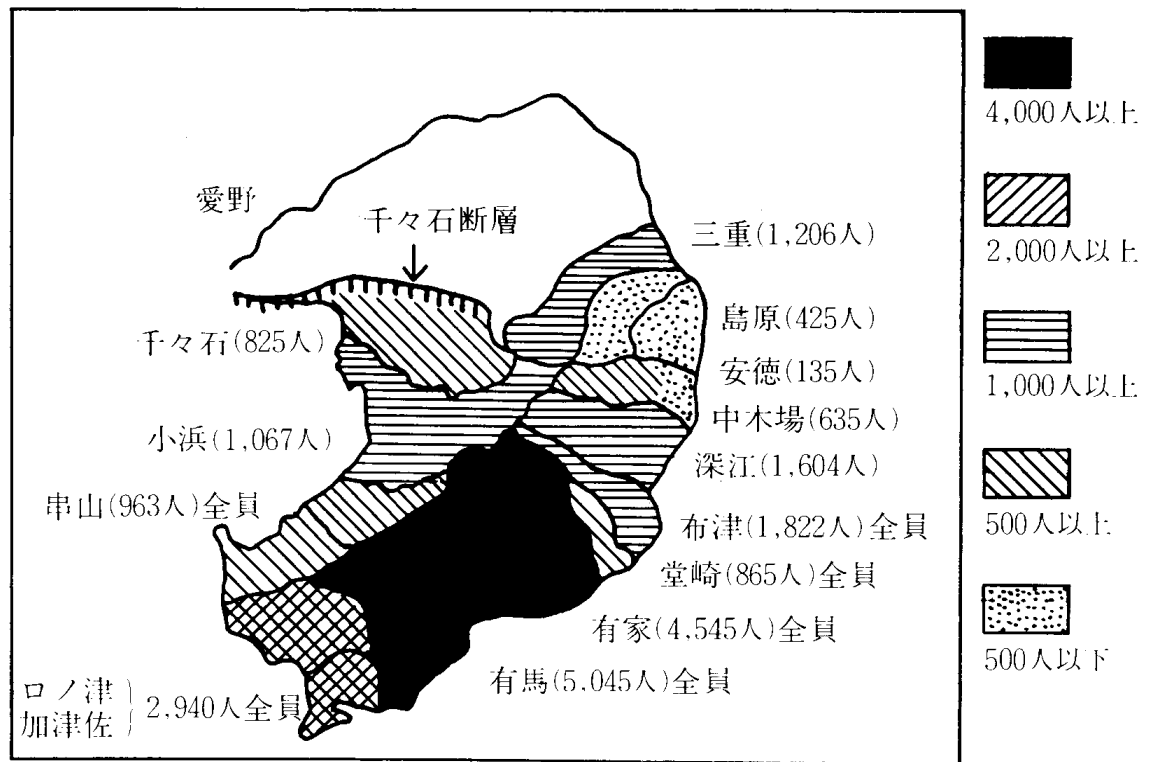
（中央断崖上に愛野展望台がある。右が千々石に下るバス道路）



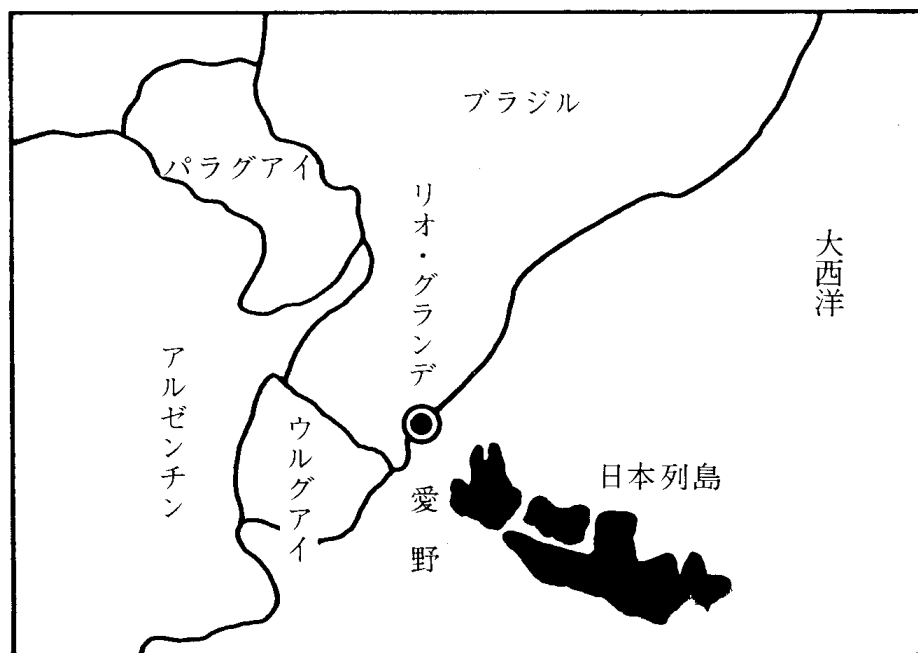
この断崖は橘湾という大きな陥没カルデラ壁（外輪山）である。

第16図 島原の乱参加数

北上する叛徒を千々石断層で喰い止めている



第17図 愛野の対蹠点(地球の真裏)



愛野の対蹠点は南米ブラジルの南部・リオ・グランデ沖である

このような陸上地形の類似に対して海底地質は愛野と事情を異にする。愛野・森山沖の潟土地質に比し、山田川似東は漸次岩盤地質となる。岩石を積上げたスクイが吾妻沖に立地するのもこのような岩盤地質の関係である。

森山・愛野の昔の港が潟土(干拓)に閉ぢこめられて、港の機能を果たさないのに対し、山田川下流の牛口が現在港として機能を果たしているのもこのような見地より考えられる。藩境論争に於て当然地形・地質・距離共に森山側に属すべき大島・沖ノ島・中島が山田側に属するのは、山田側が海上活動に有利な港の地理的条件をもっていたからであろう。(第8図)

○千々石町に対して

有明海斜面を表にするならば、橘湾斜面は裏となる。

有明海斜面が広大な火山の裾野ならば、橘湾岸は切り立った断崖絶壁の千々石断層となる。愛野は前者に属し、千々石は後者に属する。広大な裾野を通っていた観光客が、愛野展望台で、千々石や橘湾をみて驚きの眼を見は

るのは、地形変換のすさまじさに驚いているのである。

このようなところに愛野展望台の意義がある。(第15図)

千々石断層を境にして南北土地柄(地域性)が異なる。

北を「北目」と称し、南を西目という。千々石には広大な裾野など見るべくもない。愛野と千々石が国と国の間柄であつたならば、愛野の方が有利な地理的条件をもっている。千々石断層の絶壁の下に千々石があり、千々石断層は愛野にとり天然の城壁である。島原の乱に於て橘湾岸は全町参加しているのに対し、北目は参加していない。千々石の叛徒をこの断崖の曲坂でくいとめて追いつけている。故に愛野は安泰であつた。北目が安泰であつたのは千々石断層が有力な地理的条件だつたことに間違いないだろう。(第16図)

地形的に愛野の下位にある千々石も、太古に於ては愛野の上位にあり、愛野の広大な裾野(扇状地)の母体であつた。愛野の広大なジャガイモ畑の土じょうは、千々石の方が高い時千々石や九千部岳より流してくれた土じよ

うであつた。それが千々石断層によつて、愛野の下位に陷没し、一部は橘湾の底深く消えている。千々石断層は

その大陷没の証明であり今も生きている活断層である。

(第15図)

愛野最長の川である千鳥川や、吾妻町最長の川である

山田川の上流は、この千々石断層によつて、上流をたち切られ、「尻切れトンボ」状の地形を呈している。いわゆる

上流は千々石側に陷没して落ちていることになる。(第14図)

その他千々石は愛野・千々石經由の山越街道で、島原に

近い直線コースであることに注意すべきである。

七、数理的位置

北緯(32)度(48)分で、温帯季節風帯に属する。

東経(130)度(9)分で日本々土の西端的位置にある。

愛野。東端 東経(130)度(12)分(50)秒

千鳥川水源を去る東南110 mのところ

。西端—東径(130)度(8)分(31)秒

山王神社一ノ島居を去る東南8 m西々南の地

。南端 北緯(32)度(47)分(30)秒

竹火東東南に去る150 mの地

。北端 北緯(32)度(48)分(55)秒

新崎新田蛭子座

地球上に於せる愛野の対蹠点は南米ブラジルの南端リオグランデ港の沖合にある(第17図)

対蹠点の蹠は足の裏で愛野の人の足の裏と南米の人の足の裏がこの点でむかい合っているわけである。つまり

愛野より地球の中心を通り反対側の点である。愛野の対

蹠点は地球上に於て愛野より最も遠く、昼夜の長短や春

夏秋冬が反対である。

註1 愛野は愛津と野井が合併した町名である。

註2 愛野海峡とは島原半島と九州本土間のせまい海をいう。現在は干拓地となっている。

愛野扇状地

目 次

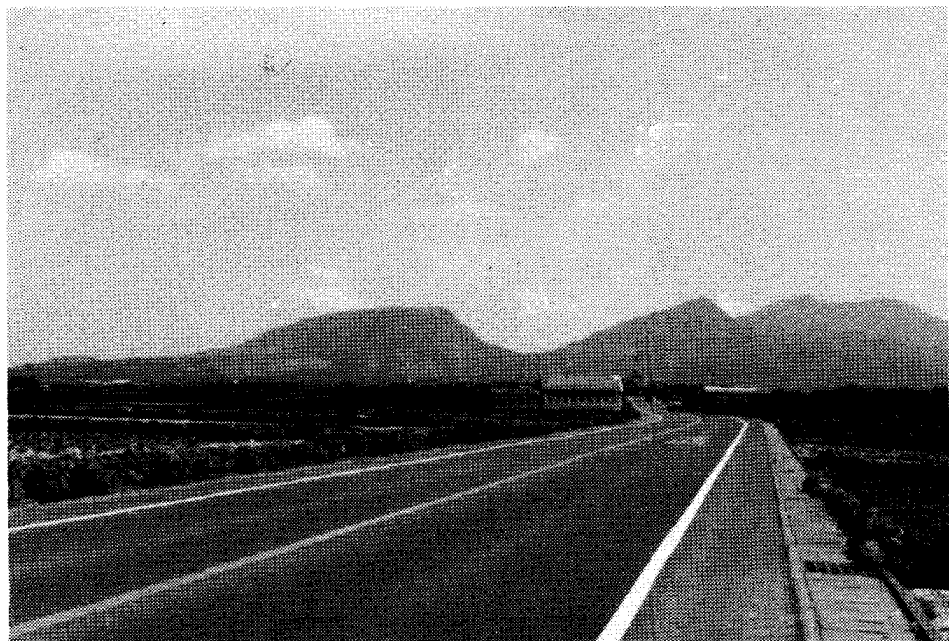
一、雲仙火山の裾野―愛野扇状地 地形概説

- 1、地質、土じょう
- 2、ジャガイモ畑
- 3、無線送受信所
- 4、畑作地域

二、美しく並んだ裾野の浸食谷 地形概説

- 1、河谷の土地利用
- 2、東京地形の縮図―愛野
- 3、橘湾方面の河谷

第18図 愛野展望台付近よりみる吾妻岳(左)と九千部岳(右)



愛野の大地は太古に於けるこれらの火山の噴火によって形成された。
これらの山は愛野の大地の生みの親である。

第19図 愛野町の航空写真(A点を扇の要とした扇形である)



一、雲仙火山の裾野……愛野扇状地

天下の秀峯雲仙岳の最も美しい裾野に位置する愛野町は、今更ながら我が町を見なおすと共に、誇と夢を持ちたいものである。朝夕仰ぐ九千部岳、吾妻岳は愛野の大地の生みの親であり感謝の念を捧げたい。我等の大地は太古に於ける、これらの山々の噴火によつて形成されたものである。(第18図)我等の先祖はこの美しい裾野を表現して「野」「原」「平」等の地名をつけている。さすがは他町に比して扇状地地形の關係でこれらの地名が多い。左に書いてみよう。

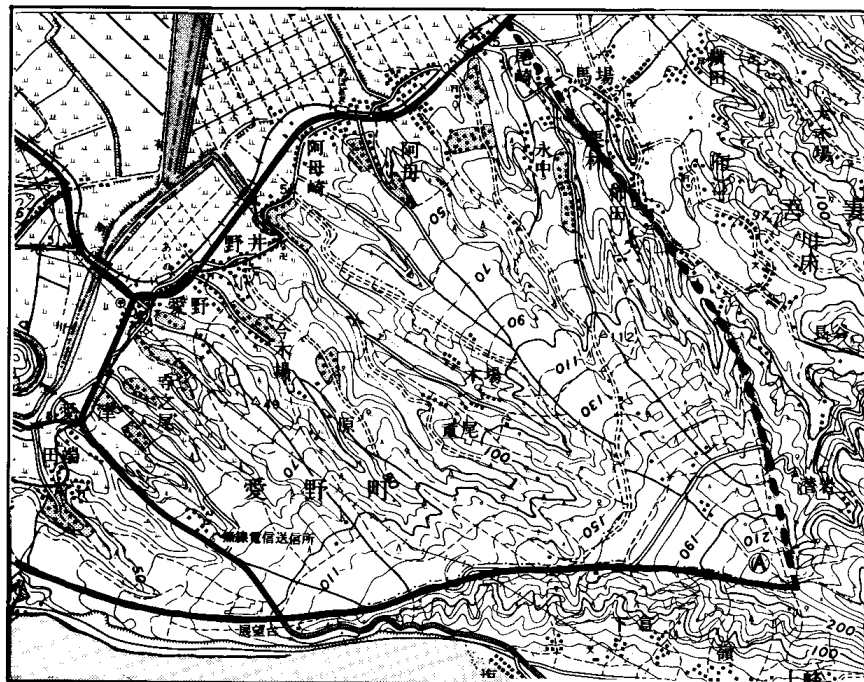
野…野井 野内 下野平 中野原 上野平 野井原
 寺尾高野 野井山 高野 新高野 木場高野
 大高野 椿高野 原高野 小無田高野 野添
 中野 東野平 野井山頭 野井山谷 野井山尻
 原…上野原 桑木原 相原 上相原 寺尾原 原口
 浜口原 上ノ原 原 松木原 下前原 前原
 平…惣戸平 西平 木場平 西野平 差出平 宮崎平
 天神平 上野平 東野平

本ノ平 四面平 牧尾平

この美しい裾野は鳥獣の天国でもあったのであろう。狩場・牧尾平・牧尾等の小字も見える。

愛野の地形は二枚貝を伏せたような地形である（第19図）二枚貝の急斜面は千々石断層と思えばよい。愛野扇状地の名前のように美しい扇を開いたような地形である。扇の要にあたる所は山田川の上流より、千々石上峰部落に行く峠である。（第20図A地点）ここを扇の要として有明海方面に扇を開いたような地形である。然しよく注意して見るとこの扇は半分開いた扇で、南の半分は千々石断層を生じて橘湾の底深く陥没したことがよくわかる。一方隣村吾妻町を見ると、この美しい裾野は愛野・吾妻町境界線付近をのぞいて、あまり美しくない。これは太古に於ける九千部岳火山活動の噴出物の相異よりきている。愛野町の安山岩に対して吾妻町は集塊岩である。

第20図 愛野扇状地（雲仙火山の裾野）



①Aを扇の要として、半分扇を開いた地形をしている、南半は千々石断層を生じて橘湾底深く陥没している。
右（東）側の・・・印は山田断層で愛野と地形が急変することに注意

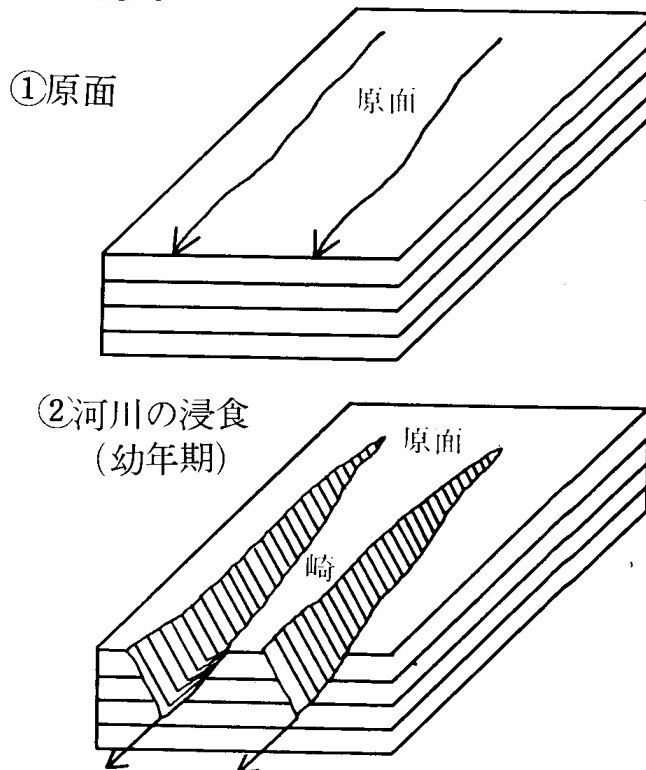
第20図において裾野の面が最も美しいのは吾妻・愛野兩町境界線付近と、愛野展望台より、首塚にいたる付近である。ここだけは等高線の間隔が広く、図面が真白である。ここは地形輪回到ける河川の彫刻（浸食）がすすんでいない原面である。（第21図）原面は愛野町各河谷の中間にも帯のように残っている。（第20図）

然しこの美しい裾野も愛野の人にとって農牧林の環境とはなっても日常生活の居住地とはならなかった愛野の人の大部分が裾野の先端の旧街道筋に住むのに対し集落は少なく、この原野の集落は「原」「今木場」等に過ぎない。又原野に一軒二軒とばらばらの散村形態をとっている。

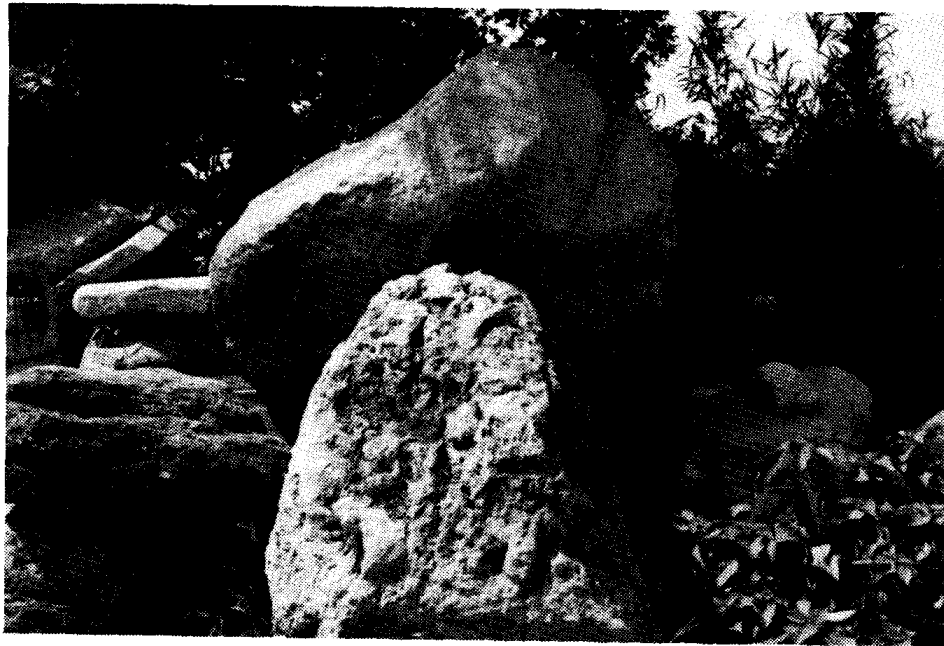
1、地質・土壌

この裾野の地質・土壌は愛野の人々の農業・牧畜・林業などと直接関係が深いから知っておかねばならぬ。地質は角閃石安山岩と称し、この岩石とその風化土壌である。白紫色と火山灰のまざったような岩石である。（第22図）これは愛野ばかりでなく雲仙岳全体にわたるもので雲仙型

第21図 河川の浸食

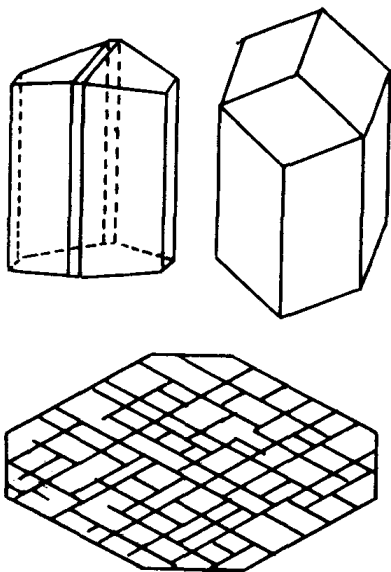


第22図 愛野町の地質—角閃安山岩(野井)

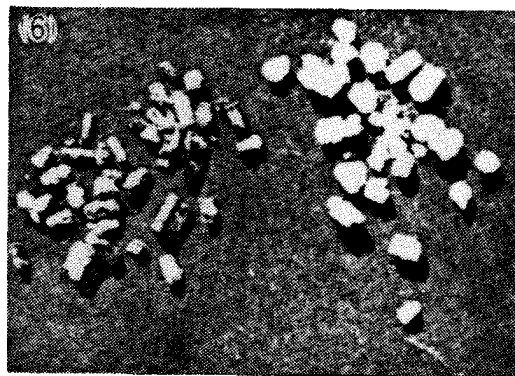


愛野の土じょうは、この石の風化土じょうである。

第23図 角閃石の結晶



愛野の安山岩の中に含まれる。
角閃石、斜長石の結晶



ともいう。太古の九千部岳・吾妻岳の噴火によって流れてきた泥流である。然し愛野の最下盤には雲仙火山の基盤となった口之津層群がある。

安山とは、アンデス山脈からきた名称でアンデサイト (Andesite) と称し、南米のアンデス山脈によく発達する所からきた岩石名である。我が国の大半の火山はこの火山岩で構成されている。富士山もこの岩石であるから富士岩と称せられる場合もある。九州の火山の阿蘇・久住・鶴見・霧島・多良等の火山もこの地質に属する。

然し日本の火山全部がこれに属するわけではなく有田方面は流紋岩と称し白色で陶石に適し、北松浦半島は巨大な溶岩台地で玄武岩というや、黒い岩石である。

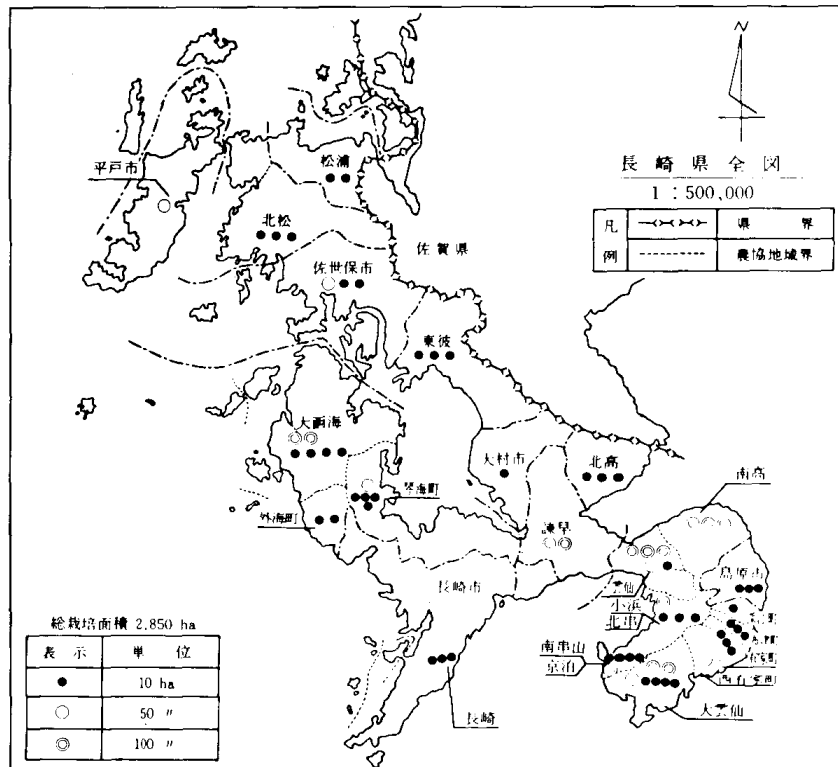
角閃安山岩というのはこの安山岩の中に角閃石をふくからである。第23図は角閃石・斜長石である。

土壌は島原半島全部に分布する黄色土壌褐色森林土壌・淡色黒ボク土壌が分布している。淡色黒ボク土壌は太古の草木が土とまざって腐植し、炭化して黒くなったも

第24図 愛野町、雲仙火山麓の馬鈴薯の花盛



第25図 長崎県秋作馬鈴薯の栽培分布図(昭和51年度)



島原半島の生産は県内の70%、特に愛野の優位をみよ

のであろう。愛津原付近の航空写真に実に美しく表現されている。世界の穀倉地帯はソ連ウクライナの黒土地帯（草原地帯）で、最も生産性が高い。米国やアルゼンチンの小麦地帯も同じである。愛野町ではこれがジャガイモの生産に利用されている。

2、ジャガイモ（暖地向き）（第24図）

ジャガイモは慶長年間（一五六―一六四）に当時のジャガトラより長崎に入っているからジャガイモの名がある、最初はジャガトライモと言っていた。ジャガトラとは今のインドネシアのバタビア（ジャワ島）のことである。島原半島が県全体の70%の生産額を有し、又長崎県が北海道を除く日本府県中第一位であるのは、このように文明の窓長崎に近かったということも関係があるだろう。

（第25図）ジャガイモはもとくゝ亜寒帯向きの冷涼農作物で、南方向のさつまいもと対称的であるが、愛野のジャガイモは暖地向きジャガイモ品種で、愛野に長崎県ジャガイモの支場がある。地理的条件としては左の三点が

あげられるだろう。

○広大な雲仙岳火山の裾野（扇状地）で排水・日射に恵まれる。

○桜島の大根やさつまいもは軟かい火山灰土壌が地理的条件であるという。一般に根を食糧とする作物は土の軟かいのを条件とする。愛野のジャガイモも雲仙火山の火山灰を含んだ安山岩の腐植土壌が地理的条件である。前記黒ボク土壌は理想的である。

○火山灰質土壌でさら／＼として根に土がつかないのも一因であろう。

3、無線送受信器

愛野の無線送受信所は電波の関係で、かかる広大な裾野が理想的な地理的条件なのであるだろう。

4、畑作地域

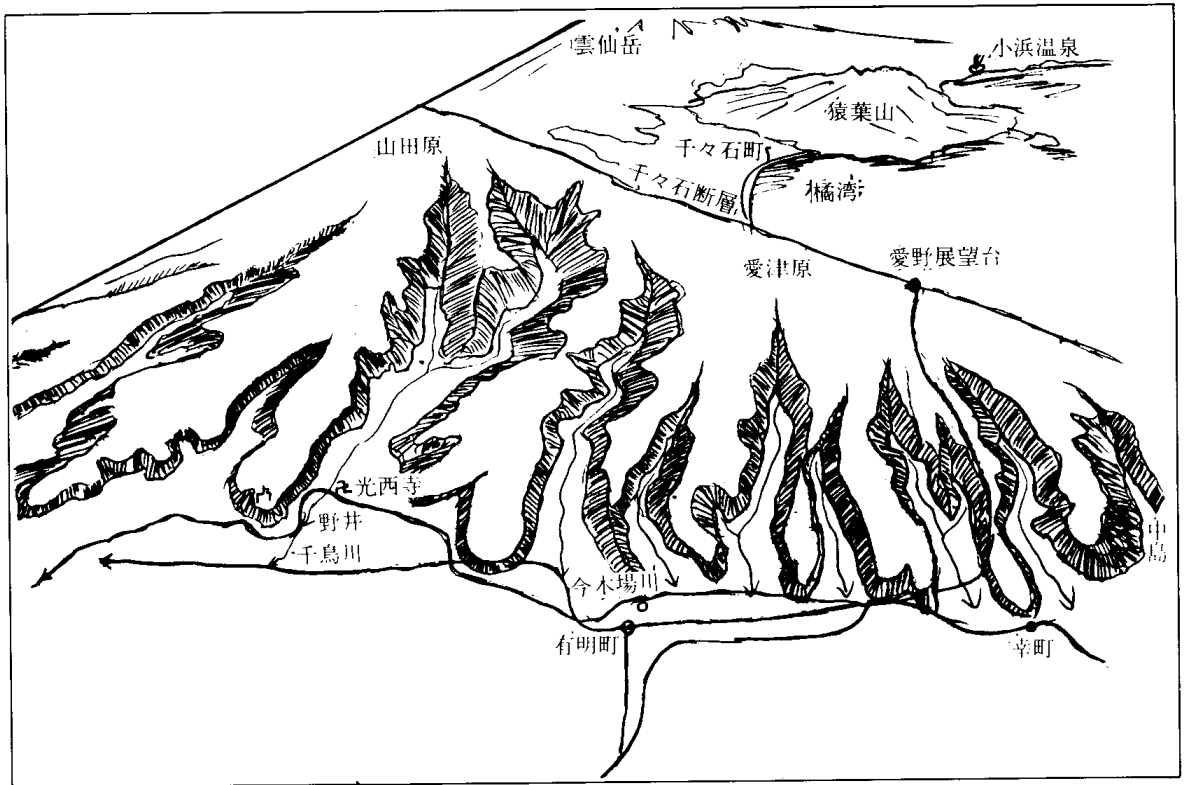
一般に火山の裾野・扇状地・台地は土地高燥で、水利の便に恵まれず、長い間森林・原野として取残された。近世（江戸時代）になり、開発が進み農場・牧場となった

例が多い。武蔵野台地・那須野原牧野原等が好例であろう。愛野扇状地の場合もこの例に洩れず、現在は完全な畑作地域となりジャガイモ畑・ミカン畑・麦畑・茶畑等は美しい。然し水利の便の関係で米作はなく、米作は水利の便に恵まれる各河谷間及び干拓地域に行われている。裾野は畑作、干拓地・谷間は米作という土地利用は、航空写真や土地利用図に歴然として美しい。（第19図）（第20図）

縄文時代は狩猟・採集経済で、農耕生活はなかったことは周知の事実である。弥生時代となると水田耕作が開始され人々は水利の便のよい谷間や平地に移動していった。愛野の縄文・弥生の歴史の研究に於てはこのことを知っておく必要がある。この愛野の広大な裾野は古代の縄文人にとって理想的な狩猟地帯だったことに相違ない。

昭和七年頃、日本の製糸業（生糸）は全盛時代で、もっぱらアメリカ向の輸出であった。諫早にも製糸工場があり、桑畑は広がる一方であった。桑は長野県の扇状地・

第26図 愛野扇状地の浸食(般空写真による)



群馬県の上州三山の火山麓相模原台地のように水利のよくない高燥地を適地とする。昭和七年の愛野の地形図をよく観察すると、愛野の裾野はY印がはいり桑畑が目立っている。原部落付近は桑畑である。現在のジャガイモ畑、ミカン畑等と比較して時代の変遷が、うかがわれてなつかしいものである。

二、美しく並んだ裾野の浸食谷

「河川は地球をえぐるノミなり」という言葉がある。地球内部の作用によって完成された美しい火山も、地球外部からの河川の作用によって順次けづられていく。第20図による愛野の美しい火山の裾野も浸食の法則に洩れず順次けづられていく。(第26図)

愛野の小河谷は美しい放射状で野井の千鳥川を最長として、順次今木場川・入能川・相原川と小さくなっているこれらの河川の配列や、東から西に順次小さくなっている地形も決して無秩序なものでなく、その間に体系化又

第27図 約2万年前愛野町の各河谷は入江で櫛の歯のようにしていた。



岬が有明海に突き出でいた。棒崎の地名も面白い。左が有明町である。

浸食の法則が潜んでいるようである。現在はこれらの河谷は幼年期の状態にあるが、いつの時代かには河谷と河谷の間の原面がなくなり、愛野全体の山野はなくなる時代が来るであろう。

河谷と河谷の間の動物の尾のようになった細長い台地を我々の先祖は境の尾・寺の尾・城の尾・牧尾・重尾とつけた。境の尾は野井と愛津の境界の尾根であり、寺の尾はこの尾の上に寺があつたからであろう。谷間は東京のように渋谷・四谷・世田谷とつける場合もあるが、くぼんでいるから久保とつけたり、又は迫（さこ）とつける場合もある。愛野にも迫・久保の地名がある。

これらの河谷は太古に於て海水の浸入をうけている。（第27図）。有明海の海水が増え、海水は潮が満てくるような状態で、この谷底をひたしていった。そうすると愛野の海岸線は鋸の歯又は櫛の歯のようになる。（第27図）このような海岸をスペイン語でリアス式海岸という。今のように遠浅で平坦な有明海の海岸も、かつてこのよ

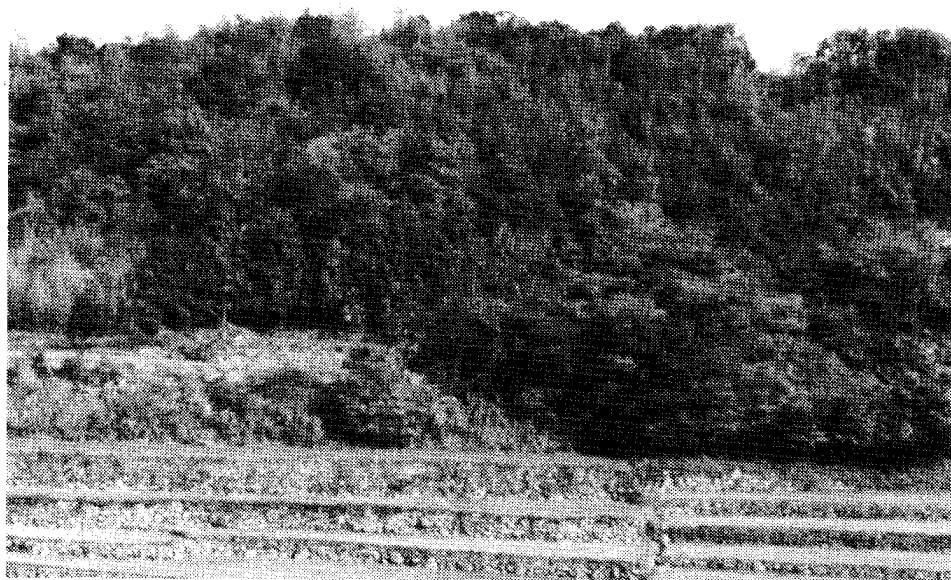
うな海岸があつたわけである。この場合「尾根」は海に突き出た「岬」「崎」となる。(第27図) 棒崎などは確かに棒を海に突き出したような地形をしている。崎の先端にお宮があつたら宮崎というが、崎の先端の高台の上にある十拳剣神社付近は宮崎といったらよいだろう。

1、河谷の土地利用

この河谷の谷底平野は豊かな土壌を堆積し、水利に恵まれ米作に適したところで、現在殆んど水田化しているのが航空写真でよくわかる。古代に於てもこの谷底平野が水に恵まれ裾野の面よりも居住に優位であつたに相異ない。水田耕作発生の弥生時代などはこの点を考慮に入れて研究する必要がある。これらの谷の谷頭をせききつて溜池をつくることは水利の關係で重要なことである。地形の利用としては最良の方法である。上重尾の溜池を最大として、どの河谷でも谷頭に灌漑用の溜池がある。

谷底平野の兩側にある崖は森林として利用されている。(第28図) 勾配の關係で居住にも農牧にも利用されず、

第28図 野井の千島川兩側の崖



森林に利用されていることに注意

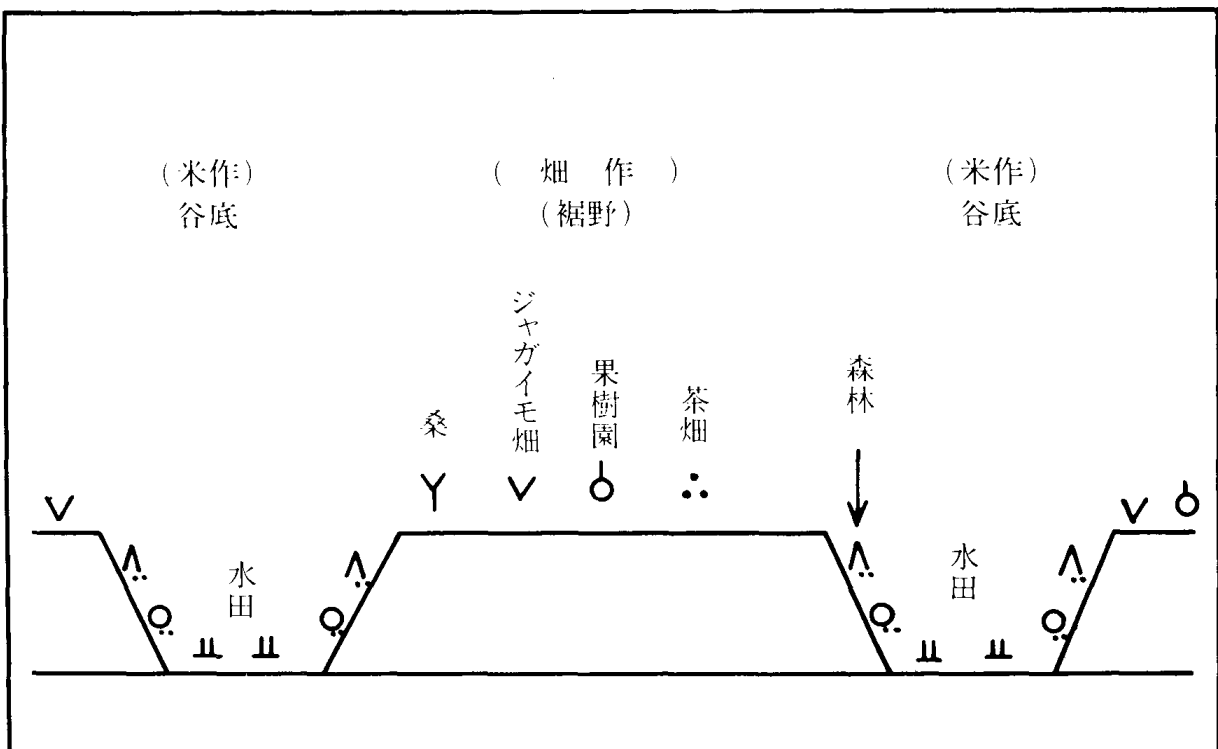
森林が土地利用として最適で昔より農家の薪炭用として利用されたのであろう。崖を登って裾野（尾根）は水利が悪く水田に適せず先述のようにジャガイモ・果樹・茶・ミカン・桑の畑作地帯として利用された。結局低地は水田・崖は森林、裾野は畑作地帯となる。この関係を図に示せば、第29図の如くなる。この土地利用の大観はカラーの航空写真が最もよい。畑の黄色・森林の濃緑・水田の薄緑色が、美しい縞模様を呈し、愛野町全体が錦のパノラマである。

2、東京地形の縮図愛野

東京の西半分は台地で山の手と言い、東半分は低地で下町ということとは人のよく知るところである。山の手は文学的には武蔵野と称し、この荒野で太田道灌が狩をしたということは有名な話である。下町は愛野の干拓地のようなもので常に洪水になやまされている。

この山の手の台地を西から東に小石川・神田川等の河が流れて台地を刻み、多くの谷底平野が出来ている。東京の

第29図 愛野扇状地の土地利用



場合はこれを「谷」といって渋谷・世田ヶ谷・市が谷・四谷等が有名である。河谷と河谷の場合は「台」と称し駿河台・上野台等がある。河谷から台地にのぼる坂には赤坂・九段坂・三宅坂・紀伊尾坂等がある。この谷も昔は愛野のように海が入り込んでいたらしく上野不忍池は昔の東京湾の名残である。二重橋前も海で日比谷とは東京湾の海苔ヒビ（竹）からきているという。

有明海を東京湾とするならば愛野町の地形は東京の縮図である。武蔵野台地の先端を利用して江戸城があるならば、規模こそ比較にならないが、野井の場合は台地先端に野井城がある。江戸幕府は武蔵野の開発に苦心したが、愛野の場合は愛津原等の裾野の開発に愛野の先祖は苦心している。美事な愛野のジャガイモ畑は我等の先祖の苦心の賜である。

東京は北より上野台・本郷台・小石川台・赤坂台・芝白金台と台地が東西に並列し、それぞれの間に低地がある。バスや電車はこれらの台地や低地をのぼり下りして通じ

ている。これと同じことは愛野町の地形にも通じる。

いま野井の光西寺付近より、中島・田端付近までバス道路や旧街道筋を通らず、一直線にいくとしよう。東京の地形のように野を越え、谷越えして行かなくてはならぬ七つの丘越え、七つの谷を渡らなければならない。（第26図）（第27図）

3、橘湾方面の河谷（第五図）

橘湾斜面は千々石断層の急崖で、有明海斜面のように、河川の浸食谷は無いようであるが、唯一つある。森山町の地形・地質と雲仙火山の裾野の接触点にそって谷沢の河谷が発達している。「谷沢」「山河」等の小字がよく地形を表現している。この河谷も浸食が進み、有明海斜面の中島河谷とまさに手をつながんとしてつつある。又島原半島を九州本陸から切り離さんとしてつつある。

参考文献

地形学	大正一三年	辻村 太郎	古今書院
日本地形誌	昭和四年	辻村 太郎	古今書院
政治地理学	昭和九年	飯本 信之	改造社
地理教材としての地形図	昭和五年	本間不二男	古今書院
地名語源辞典	昭和四四年	山中 襄太	校倉書房
日本の地名	昭和三九年	鏡味 完二	角川新書
長崎県の地学	昭和四六年		長崎県地学会
土地分類基本調査(肥前小浜)	昭和四九年		長崎県
島原・諫早間の領境紛議	昭和五一年	西川 源一	長崎談叢
島原半島の地質	昭和五二年		島原地学研究会
肥前風土記	昭和三三年	秋本 吉郎	岩波書店
多良山麓	昭和四〇年	土肥 利男	昭和和堂